



五元集

拾遺

貞





晋子一世の青白いこととくを五元よ
はくせりといふも真阿の自画
戯言の句をありあはハ汁百遍に
酸吟又ハ梅巷の曉橋店の昏ら
らも是をいしてねるあまに
ハこれをもてさやして箱よひ女物
よよめ吾家この青檀とよめを
こころれあましひさしなまめて
編てまとい書とあまのい

五元集拾遺

春之部

日の春をさすかき一病れあま
と年之也家中の礼を早月水
松のさし伊勢の家ふ人き誰
神明町小石と一巻
行合れ松もくくさかさし并
障ひと川賣りも如日の新江は
病さるあま影剛けくく千の女

元日や月見夕人乃橋の暮
くあやうや南時紅裏四天五
え日れ炭くく十の指忘し

手_ニ握_ニ蘭_ヲ口_ニ含_ニ鶏_ノ舌_ヲ

ゆけり紫や白ふくくく筆くめ
作きの分_ナ野_ニ是くや去れおねひ
さう妙にれ江の松とたふさ
紫のふあくくふくくくく
紫くくくくく連歌や信ふさの
紫の松枝紫白向ふあくくく

法本かこくくくくくくくくく
かくくく

蓬萊の松くくくくくくく
海竈牛も雜糞城有くくく

額黄金

月ふ冬見寸一万夜と法代の去
ま水く體のおど給涼くくく
春五正月老

生死のむくくくくくくく
明くおのふれくくくくく

初まや頼るあつね辰子う
世の中乃榮耀も事とわけは
糸文の四判を来うま子此間

蓬萊の韻

嶋をよび之の書院此かやば

福祿壽の韻

長き日や年此から乃乾は作

宝引の韻

保昌らうういぢう胸ふらう

松うやまのさくあ海おすう海
り花さかた若よ屋上の春か海し
喜れらか海く能去のよと海

若菜

傘持冬はくうひあさうま菜か
菜は冬迫し白奥を若柳川お好く今
はうひの七程打冬まをかん
ううと菫書よふ里の朝若菜

大根の画韻

兵乃ひかへぬやううま此日か

巻首須紙にけぬ帳の之取目

は白多陸月土日田市に集り
家々々々帳のあまははかきしとや

梅 栞

さす枝れゆととととや強るの梅

藤之はる人平

古く梅おし入きよかふ家

白主改名 詞出さるる

白主の向れ隣子やむめと星

梅おきうとととと白帳と

け白又文字ちるはてはす借へ

小袖さるく休自くむ免る妻

若の梅振いりさあききう

芭蕉翁百ヶ日懐旧

雲の梅まらむむしのみむし

詞書略

三日月此令あやかし一園の梅

詞書有今略

鏡のこ影を了恨の柳りか

曲まらと曲てすかむ柳り

あまさんす石松の掛物自画讚

凡がうふまゝに由少の柳うふ

山更上京

昔さしもわくあそびの柳か

傾城の韻

昔柳北額の栴や二ヶの月

鶯

鶯より長刀かゝるおけし

うらひ寸の暁をくさりす

鶯の羽々々笛吹おこせ

うらひあや嵐ちりり園のひ

あゝーれ

鶯の子多子ありりり

鶯の消ぬ富士をくさ

枚起く角を見する

すゑうは不袋さす

六箇の意

自津意系所北猫か

穿弁意埋く

幼意く

穿寺意柏木乃柳

拾

思他意 飯くへて君のまへと新松栢
疑点 花の夏胡蝶を中 似る辰女

人ふこまぢりの粉と少うけし世
年少のあふさめりあはす思ふ

吉原の初年

初年や賽後よみわき花

初年小舟のわく此例と少う
の舟子達お旅終りて

いの字より習ひあそびやいざ山
山の習より乙急とくす入日か

川邊 篠さす 邪広と見え
帰る原糸はさるも古くやかまふ

授記品無有魔事

くまうしーくくく 彼家の夕日新
不生ふ滅れんを

海棠の舞と思ふは福人像
伶人此門あつーやまの声
世の中身何んがさき難子此声

惜春

梅らうやうと 簪おせん風巾

か川一や江戸とを繋ぎぬ風巾

支序のき地のはろくしむるふ

白川の園より見返すいりねり

白真露命

目と位お生イッヒデ雪う真に腫園

ふ奥の及りりねよの川けき

画攢

浦崎うきりりのまきり露此声

引くしきとくこのふま此弱

駒とたぐき見る傍ふ露此声

すくも揚やほりやほりし

泥亀の腕とあもくく去りし

燕すくもあもくくや燕の枕

東潮海守見口

出せりや人並世話と連衣

屋敷入やまぬいふ路くおほい

鶏合

炭喰のきくふきくお新ひい

毛衣り服とふきくお雪キヨク

刻す入るくも死冠と簪

老翁此よりふまやふぬ園本丹
翁足とひききん園の清きうか

汐干

貝はくや白洲の末此流是松

貝く貝とむきゆを

あさう貝むの紐くくひぬ
夏沼や塩瀬ふよす於さく貝
子寄貝二尺の浦を産湯りか
浪推ふくさく嬴螺此かきさ
命ふくやうく上げくは此粟

海松少くや浪のうけくは此貝
すく貝き此高濱又くく
くさくを花をすめくす貝
江橋や且船ぬく汐干貝

雜

かつきの神をのまを此雑

くさくくくく

世志はかま酒くりん娘、雑
と者く雑のすく此新あり
雑歌のさくくくく

死

猿のあつはなをさへめく 櫛の家
さくす 櫛ふの目玉の志くせく
口ひらきを翼く 吸き 櫛小
こまき 櫛中 教も 櫛小
京中 一 世のさくや 櫛小
山 櫛 櫛と 泣く 櫛子 櫛
是 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛

豫田の書室

山 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛
浦く の 死 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛

教時と中一 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛
去 櫛 の 車 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛
櫛 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛
大 佛 膝 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛
江 坊 や 櫛 の 櫛 櫛 櫛 櫛
徳 利 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛 櫛

庚申の雨と不登り

けしきを人ら女さるる子見らる

讀莊子

彼是冬嵐雪の俗子真のうせ

花多もつととあはる群衆は

かんさやちりり花れをうも

ふ下けくやうふがうさるる

神力品現大神力

法のみちるやうさるるときく喜

憶芭蕉翁

月夜や洛陽の寺社強くなく

代撫

彫^り笛^つ縫^つ簾^つ花^つよ晴^ん浮^世は

屋^形舟^ふふ^ん女^中お^より

湖春といふ

法^さよむ^む経^丹と^わり^る花^は夏

名^さあ^りや^作た^る布^は花^さめ

櫻鳥

花^は凡^や天^女負^まり^て花^は後^に

寒食二句

を人合や窟下小猫の目と怪む
く案すも小寒人合の歌古自鹿島

画讃

友のら花を山吹に
山吹の葉を玉を
玉を切て
菜子此里の菜子
乃ち

あるくの子の名を
ことりや
舟小娘の菜子

ちよる舟のさくら

何必逃杯走似雲

けれを
福あり
俗ふ

三月

白雲

長之部

寧耳己

白壳もなるとも身ととるもく
は新もしよのトとや更衣
ぬぐもや冬千の親者衣く

東叡山院

傍正のまきさひとくや多楓
く日ふりとも浄瑠璃敷れま簾

時多

わくくさす二声めお冬出馬
あはあうてトカテねくらふりおとこ

多と守るお寺お鬼お子教

山田市之丞

ちのくとゆすはもや郭台
親多て耳とわけておと
ま白くしとす我と帰りの杜宇
証らんく警破付多神の戸お
おまくと務まうともて引飛に
ほまて来すお燈のうちやうかお
おまよひ子とて一声を

郭台中入すそのまを紙の那

さしこもる木兔うさぎのくねくねと
驚きうごたう奥をほりゆく
岬の戸や犬も地を隠る者
はたし

ゆきしきあやも輪ふある浦

鯉

ふれとある夏のこえゆふ
くねの地もふくくねの鯉
書鯉カイク此卵の中此魚ちり
人のこゝろし

人のこゝろとすくあはしき鯉

本質

みよき海をえましく鯉
丹根ニギハヤヒ系がのとのやうに
系勤と

黒牡丹クワダ花や新しきの花
むらや深山を名やうと
頃ヒナ広北山うへはふ何とん
嶺ヒナと少して此卵のふと憎

浅中家の義士等といふ

たまたの穂と
伏見此何系り

杜若女也の
何城の暮古屋

けし此玉朝粧をの
静し隆冬風も

けし此玉朝粧をの
静し隆冬風も

静し隆冬風も
女子もくけ花ちる

女子もくけ花ちる
此須弥の

上野寺

灌仏や暮しむく
紙金ぬかる

紙金ぬかる
やう世交を公

岩倉亭題送懈

みしりおや清し
能くや朝日す

能くや朝日す
あまの別業

あまの別業
内川や舟れ

内川や舟れ
枇杷の葉や

枇杷の葉や
秋を也志げ

秋を也志げ
馬士能く

馬士能く
まふあし

まふあし
能化堂

蟹の麦蔭一よ年と免やしくわ

豊年

ぬら味増ふとを溶くむ瓜芥子
干瓜やたうらふてもよまは

祝産育

たうちの皮と脈の結つみり

大町亭法言 洞玄略

はのちりん菊羹四もわくもりふ

志あひまは法坪の梅子けり

梅いりうぬかのおりあよおあま

壬二集

さきまのひとち月ふあま
名とうへといふひすあま
とあま

さきまのひとち月ふあま
なよあまは未紫のこして紙のひ

かやとちあまをえんて

ものぬれ懐甲や庫のうら
糍うらん驛平とあまを鈴あま

懐網沖ふき束つ帆りや

懐之長者の夏や長牡丹

画韻

粽の中をみや草の紫台蟹
こころを元始のひかりりふあや
根合や清地もむすむ管

興文

けさここのめや音の夏田沼
千山亭新完雪舟の松子
隅の草をみよと新く五月雨
さかこよやうし吉野と出あし

之味線や藤衣マキふむ六月雨
燕もかろく色か——さつとあは

題江戸八景

住くらすまの深川の松花雨五月
ささきもや湯の極赤山おけあ
五月雨や君のふれかきさき

江の鶴

熊雨の窟津路一曲閑く
何と書ふすらん鳴るむ六月雨

傾廓

八之湯やちりちりやうん虎の
旅人とあはれそそ

桑坂や園の五月始めの馬

腰紙

藤すりの、髪身を交麻のす組

自愧

扱あふまを母麻さうらうの糸
多勢鳴くおまふ極りのつとめ

和古詩

只を焼く多勢を煮る扱河津

いそれ杜園例あうらうせり

あしと織くうらうらうの糸

むすまへと磨ひのりつけ

うらうらうと糸ありまの昔

かたひ

おむけを鳴くまのりうと時

川糸の淡

昔叫ぶ膝うかしのとを流り

菱川小菟より仕出す着子ふ

字は

葉あまのくまのきりぎりすの音ふ
 叶の戸ふふの葉のふふ葉のふ
 葉のふふの葉のふふのふふの
 ふふの葉のふふの葉のふふの
 田植のふふの葉のふふの葉の
 会ねのふふの葉のふふの葉の
 ふふの葉のふふの葉のふふの
 招我れ早苗穂ふふの秋のわが

會盟

交のふふのふふのふふの
 ふふのふふのふふのふふの

菴前栽

隣官士近家の奥とすけの
 ふふのふふのふふのふふの
 ふふのふふのふふのふふの
 ふふのふふのふふのふふの
 ふふのふふのふふのふふの
 ふふのふふのふふのふふの

海雲和布とや巻の綴義ま角豆

望海觀遊

海松此多や夕之客風の磯洲松

濤倉此濱出と

海雲少くや見れ九出みと答ふか松

止波浦

地引すと管のすかく暮る此夕

壱浦の桶水押さりては橋の

下へ入

帆とくう鯛のさへや草堂に

舟興

文とやと写る此の光り那

朝日に七星をふくむ名古や那

石此枕小郎やあつるそ此を巻

岩根とす蘿一鱗あり走藤

抱女小むらさきをかきて浪をほ

藻此をふや後千かかてさるる

藻のふや海老蹴す袖ふくはる

落れ夢中と思ふもそ一深ま

夏あまの沈上花破風みす

建長寺無詩裕了人

夏小詩をいふ俗が夏木之
谷木ウツホの鬼をかきこもも一笛

午の年午月午の日午乃
時うけふ入る

駿馬埒小入新卯其いふ

日休群いけいふ遊ちうい
路ふいけいけいけいけいけい

いつの向いかりひらき友此月
きふ入る月や志流り中夏土の山
夏の月影を夜ふいけいけい

市此海金のいせさよ

出はくろい葉あつき此影をい
夜讀書

影をあつや花いけいけいけい
申の日とく影をよるい

お早新ん紙帳か風を入る春
影を名のいけいけいけい

群う志

音の吸り松とりけいけいけい

宗長のいせさよ

橋此一の二のを較せしと
むし白ふ花さく実さく陳景之
收さく火く夕影白く 橙さ
松賀秋航岩城へ訪りて 功者千
位もややうへはとと

吸さく火く杖第く 園家少

佛骨表

去くくくく 曜と折りく 韓退之

射者中^ハ奕者勝^ッ

曜子よしの道子あさる 燕あ、河

信徳くあさるく人眼をさる

錢子

梁の曜とさる 馬此上

曜系くは一子折ん 友の系

云まかけくく好日やも

曜長く平妹志也老や瓜作

母のりや又流りく寸舌桑瓜

あさまきく 晴中かきく 六皮ま

あさりの 塩系のみりく 瓜の存

瓜の一花 又さるく明す

けり花小指のやまのく瓜持糸

浅草川道地

冨士行や細代小火あきぬの小屋
白きふもきまらぬやふー落
くまふくは又あふーいふー日記
明これのよれ木のともやとるは
氷室山里葱北紫白ー日々料
不奪百姓膏腴とら文選の詞く
百姓たふゆる油中一扱酒

咽農

焼籾の背中ふあつー田子よ
和粉買や朝見ー花を夕日
豆ふや猫は糸目くちを思ふ
葉子ふくくや六月卯く
百姓のふおくはさきよ川むき
白くをとり菅ふー川價水
二三とらふくかひのよのほ
くは感ふく御借此奇仙は出で
上野門ふふくくくくくくく
のふあふふあふふーふふふ

林のうけ小使をたふしめらあはと
少くいふ者此れはさうくしおる
りむく此老の奥小戸をくひる

あまふか非人妻一麻蓮

一晶のあつら

日蓮よ木す衛よ蝉の鳴く時と

空蝉小吉系との折紙の那

木戸處とわくまむ

蝉と聞か一日鳴くおれ處

入湯の人木質とくうりし

蝉の音すしらとあつら指し

縁子と懐紙の表帯にしと

小かろせりしと

飯椀よりかけりしとあつら蝉の衣

視彼蝉の貧者小衣をやぐるを

祇園敷のかり金志はるを

松の葉とまきふは月のお膳に

伴天王の法帳布

里の子はあまふしむ報子

会友叔談

今よ 梵蓮のまはるや 梵く那

の 詞古略

秀 一 娘蓮 不 淺と包

の 得正 觀音 像

ふ 蓮 膠 中 志 蓮 白 白 白

あ 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮

あ 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮

あ 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮

あ 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮

あ 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮

蓮のまはる 赤繻アキエとく 暑く 暑く

蟻の 欄干 暑く 暑く 暑く 暑く

冠里公 傷中 松山 初入の時

川と 白巻 浦の 菅屋 北 軸 蓮 蓮

小女 北 帯 赤 糸 蓮 蓮 蓮 蓮

信九 帝 持 蓮 蓮 蓮 蓮

朝比 奈 糸 蓮 蓮 蓮 蓮

家 糸 蓮 蓮 蓮 蓮

蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮

く 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮 蓮

生此松、いふ忘れむ汗拭ひ
死の海と汗のうらやあや中入

山田悦亭より

汗濃きよ衣の背縫れゆく
身おろくむ一まぬ織も浮せよ
何とぬ織端編きよ一紗の程

小所の談

腸けく休むをくく大くち
かたけりのおきくらすぬを小
まこれ松よ風の垣ある庭う那

くすの、凡信日おくる 園庭小

所見

蒼り家り星り川色に涼の那
翁の又よ那のすま色て又と
はよあらしもすをくやうやく
なることとあを

夫山の海を重おとと涼の家
夕暮涼すしよ風の誓小
涼の母尻ぬり今一 遊り那

たを 老年と女と信して死の香を

けふは老ふるを
夕すまみ

布袋の襖

夕すまみと夕すまみと夕すまみ

祇公日次の歌と夕すまみ

河原の陣利と夕すまみ

芝居の夕すまみと夕すまみ

朝令の夕すまみと夕すまみ

夕すまみと夕すまみ

夕すまみと夕すまみ

抱き合ふ妻と夕すまみ

曲の夕すまみと夕すまみ

漣や夕すまみと夕すまみ

夕すまみと夕すまみ

夕すまみと夕すまみ

夕すまみと夕すまみ

夕すまみと夕すまみ

夕すまみと夕すまみ

夕すまみと夕すまみ

夕すまみと夕すまみ

夕すまみと夕すまみ

夕すまみと夕すまみ

日あけや 沼のそらるる ぼろぼろ
 たるふも かくして ぼろぼろ
 わらわらふと かくと かくと ぼろぼろ
 ぼろぼろ かくと かくと ぼろぼろ
 判後を かくと かくと ぼろぼろ
 かくと かくと かくと ぼろぼろ
 け ぼろぼろ かくと かくと ぼろぼろ
 世あり ぼろぼろ かくと かくと ぼろぼろ
 かくと かくと かくと ぼろぼろ
 かくと かくと かくと ぼろぼろ

黄すくく かくと かくと ぼろぼろ

烟雨村

夕さや ぼろぼろ かくと かくと ぼろぼろ
 申さく ぼろぼろ かくと かくと ぼろぼろ

雨中吟

白ゆき ぼろぼろ かくと かくと ぼろぼろ
 ぼろぼろ かくと かくと ぼろぼろ
 ぼろぼろ かくと かくと ぼろぼろ

夕さや ぼろぼろ かくと かくと ぼろぼろ
 申さく ぼろぼろ かくと かくと ぼろぼろ

夕まや家と只一啼一家
ハ雪よりけ嶮嶮とこの北岸
根挽のふすくはや一雪のま

望相扇

平らら又薄金をくく日々照る
くく扇を拂ふ似くくちり
扱きとまろくあふくくくく
はの戸むおき轟の崖の如

醉登二階

酒の瀑布冷夏の九天より流る
印や海やくくく此下のく

廣のあまふ

すびつくくくく夏の炭俵
障か子樹とすくくくく
先好とあまふくくく
何ふくく六月相と桂人
市中の老伝くくく

紙

秋のくくくくくくくく

拾

拾

法後

夏後山作の若れ存より

秋の部

井の柳三ふふと相此一葉

ふれ臨一葉ふちうくむま

清山子のとととん 画多探雪

うう琴と筆と大報と後中

す色一一中

右筆

けーと相の一葉や半此声

竹居ふまうきうくむらひり

傍をとひり

手拭の籠よりととと一葉や

ま白ややぬく様此一葉川

御公

空や秋時をさゆさく七言羅樹

父の想い一葉ととととと

みよふととととととと

拾

らるるはるるはるるはるるはるる
るるるるはるるはるるはるる
妙感の餘るるはるるはるるはるる

秋とらるるはるるはるるはるるはるる

梧枝亭にらるるはるる

乾ヤ允坎震離艮坤巽

るるや秋のちやらるるはるるはるる

とらるるはるるはるるはるるはるる

アとらるるはるるはるるはるるはるる

秋夜話 隠林

雨アヒにヒふお織や秋の義あはるる

市隅

西例に下はるるはるるはるるはるる

女はるる男はるるはるるはるるはるる

市中の隅

あはるるはるるはるるはるるはるる

朝アサのアサはるるはるるはるるはるる

藤の仙洞様をいれらるるはるる

あはるるはるるはるるはるるはるる

朝アサはるるはるるはるるはるる

拾

しんぞと画なるかけその後

あさりのや藤ふ出るよし遠ある

藤下千三あふの瓜此二世系

郭魚ふり川若出ー一沙使

る心の妻志のまろく恨む程垣

七夕

早のや人此心張瓜くーさ

まの橋や侍とる空居の早野

素堂の母七中七早の女万

葉の秋此七叶乃奈の勸を

早此夜よ花は細くく春をま

三遷のひくは懐ひしちのさく

くる娘と守一のむもさしと一日

あつて七夕早奇とまらけさく

とけいさく

又月や春をくみ字も母の恩

栢買らひと川流すや天の川

妻早よあふ一らせあさく

大切此おを物よりく天此川

鳴早や額より早子鞠わら流

秋七種

くまのなきわらわ花や女帝也

かきくへのんちくしてきりよ
まきうひはを七夕にけし向州
よせしそ

雲のすけや味原と一そるふりか

海辺曉雲

橋もや朝暁一そるふりか

浜原のつらきうそかおむらと
こそきれこしふとむらうり結縁の

夏のうらや木子とくわる風小

七月十日此夜在御り合禮子

木子のうらやとととととととと

夏とけりし器骨のむら萩の角

御去あり男守

萩もくふ昔薩くく刃一と重

又そ萩のまふありこまを略

とそこれあか松貝ふくくくく

まふ系新と西瓜よまうく借は男

牛少とふる娘降るるそ女帝也

遍照の後

傍よよ鶴のわつら女帝苑

短冊やちり紙の迷惑さ

葛の葉は赤い紙をくまひ

葉くらさる男の推つこ

くげふら

西瓜喰ふぬれ髪は遠き

神仏ふはき安まゝあやも

沾徒餞別

鳥をむ人のちりこま

うやとら見様のき免事人

芭蕉の葉も角をかく

赤く白くわけしむる

茅とらふ雨と雨風の

鑑素堂秋池

凡秋は荷葉二葉とら

茶の冬もしまは掃除や

盆會

かきすふりれさる魂の

きしちり紙の借金乞

右のこり文わく

陀羅尼品

浪と罪此様や暮しん利

分都原

みちもきや分原ふん白く彌藤
 又月とくもく刺結と彌藤
 一世の人此のつひさすと守と
 結切此かくても屋々く大教と
 生靈酒此下くも親仁と
 ちかかかこも入はふとあーふ
 為ひかこは此方とつふまよ

切ある事いを

親と子もまよきくや蓮賣
 相結や声のぬりくもき才子坊と
 一長を渡をたろくはとく
 踊るく妻此を希ふ酒とく
 とくつと名も優兵とく角力と

雲

赤院のけ戸さくらんをまき也
 船とくもくく此處や園乃外
 五月やひくくは娘の子

子子為少々梅とくふすおきん
茶此けき吐志むら夜や影三腐

芭蕉座の歌

吾座と私教と隣一とあはれ
座の可妻取の犬あはれなり

長糸よなるる懐紙の奥小

二巻を下目とさす一なる座ふ

宇原の山ふ

川霧やそ糸之少くこのけか滅
音夕烟り来りけくすま此浦

寂蓮

和分此骨^{コツ}核^コり山の夕夕那
ま海や浅黄おなりて煙乃書
秋の心は脚一冬後の庵えり

南流の其詞る子ありて聖
因此玉川より西行上人の堀井
わると強り一ふ

濁り井を名少お流りと秋此雨

七月五日工部之回忘あはれ
智海作をよもあひて墓誌

浅州誓願寺念佛堂

三人の声不あそよ秋乃夢

虫

すくろふおねりーさうす浅茅
楮よふらまーと碑の妻いすこん
ほらひしてあまやうせれまもみち

元禄六年仲秋沼川芭蕉庵

返主の戸よ入し

牛綿とる馬雲とらぬ生駒山
一ふの妻もろくむ天保丁

翁ふともあを道てあそ人の
めくろまふ

荷分り荷分り此文や天保丁

惣湯豆腐

惣の湯の厚と薄と豆腐汁
土を先絶の切おほくはとらた
卵を枕席よやまんやう一歩裁
場子のとむふさーと左に
みとたろくむくくそ命と
居れそあふりけてあけり

洞のこを強し。さきしつゝをさ
とひせしつゝ。あつちす。愁
眠をさすやと

陣中の飛脚もあつちす。あつちすの
音。北山きき。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの

潮をさすやと。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの

あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの

月

あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの
あつちす。あつちす。あつちす。あつちすの

目ふありぬ波よまあやうなる影交

河去あふ略

名月や今も年々筆おろすま口

河去略

信濃小を老子もあうりくみの月

仲磨の画談

月うけや舌を帆おすく三笠山

長柄又臺の記

もる月とむしーの橋は朽目か

月を信也紙紙此小者本言れ下女

まづ月や侍おあうの君と伯父

満百

阿の月の月よ成りて母れ影

娘おろ丸を程を月より柳

酒くさる教うらりけの月

唐介此片能く一月の雪

燃くつる火此をやまの目怒

雪と様と画く

中橋の君の心あふふこの月

月れまゝ詩の舞う山常川成り

傍と叫びて

少便と記て無月と云ふことあり
脚めやる函谷やうふ流馬正
月日此粟氣痛菊うつ此其
回外一推りる里此松葉あり
は多材やふ歯ふさめらるる
いり粟子神かりる核のむら
深川一若御さるる

粟賣のま園くから用あり
癸酉八月五日此直去父葬

送の場し萌心の想を懐

て四生の起別と云ふ

一 涙の中 輝る末葉を脱ぐ如
野たちとさひーをのを照らす
稲若子少中を移しふ光る如
稲くや穀と揺動葉の中
松の尾の海子さうゆと
堀うらうらう松あると
此すふとさあす中よとめ
初らげらる

けふぞ、都の古やあれ子持

松のよき花と吹あけし梅草

東國風来す此山のまは

るつり付

冷泉の珠教しはあけし草

草将十唱句

其表 不二班ナリ 齋草キョウ

草クサ 四交シウカウ 白杆ハクカ

其軸 草クサ 蠟燭ロウロク 消シユウ 半ハン

石突 角仙屠角ツノ 蒂テ

つらみ 筥ハコ 回クハ 菌キノコ 獨樂ドクガク

燒松茸 松枝マツエ 菌キノコ 返報ヘンポウ

塩松茸 不フ 香カウ 松マツ 雪漬ユキヅケ

京キョウ 女メ 山ヤマ 雨重アメノシヅメ

其賞 北キタ 寛ヤスニ 小松茸コマツタケ

献上ケンジヤウ 祝イハヒ 菅崎スガサキ 生草ナマクサ

通

翁の下オウノシタ 夢ユメ つらみ 名ナ の 草クサ

藤の甲ささやうと一園の菊
千は菊が人れな字志れし
袖のさや記とくくは菊のさ

重陽

菊のほ葡萄れくふ志くみさ
千家の駿人百菊れ依信
さくもみらるる金をらけて流め
入ふよーある様のむー菊

内友風虎公十二回忌

菊れさやたがふよさめ後ほ

九月九日庭を拾ひたるふ

さくや名も星ふ輝くれわさ

葉花錢別

友成冬さ菊れ使了様へを
子孫の袖乃ち子れりし自れ

十二夜

白鷺の養めく屋さ存れ月
さくもね御さくく子

浮の月松やさくくは菊

けし子とふふくくやな
樽むしれぬを粟よ鳴々
家々川本をさききり
鳥

木免や百舎よえうり
仁き徳の片山うけや
山うしれ戸よも忘よ
喜院よとく稲負る
小鳥を長哥

四十一 小叔の中山

中村少長夫婦連下上

京ヤ一付

山鳥もくさきくもむ
紅鳥りく山鳥もくさ
山鳥もくさきくもむ

新越六向港

鳥のつらきやさきく
木葉の食葉を秋乃
秋

秋

丁酉出の甲子を以て室に於る書

九月五日

福の松の形跡を以て秋を味はす

悲園非

傾城の小寺を以て九月五日

多々多

夢よりうらなひてぬ其名もし何の
葉の如き也半冬を以て竹雨小

神唱のまじりありし時あり
今態を志すては其あはれに

園河の繪

系山を以て結つてくくく

と申代義七回忌

七と申代義七回忌

と申代義七回忌

しるがやまの一圃の一ツ松
時雨瘦松私のお千中と云はれ
たもしるがやまを以て

得も落くもさぞ中こそ時由は
松東のしきも向を尺すす時あは

けり冬音子まふま八幡
さふ信もてのたありとて

用 文之略

木くじしと世子拾は是如之卯栗
用とあり如相平のく川せ貝

芭蕉翁終焉此記之略

なまうゝをさきよりくすや枯屋に
ふもあふい葉山子にとりる鳥か

みよ木とてい免一や山のこすま

曲如平と幻住庵よともあひに致

翁の原もこすといふ推の末と

せり落しもすまあ翁の末はたか

玄宿を世平尺するさまう干菜賣

画跋

松一末を食のおとるは枯中か

坊主おま清及心して人々お清

坊主とくりてた

坊主少無清小く清坊主と清

朝辭の書や川らむ夢人夢
細代も大根望とどか光り

あひまの海

福天の床机くさるや仕切帳
子冬衣ぬ親いば糸あり夷海
多とそ病のおのきとく行りやおれ声
滋米城れ火洞りわくくおれの夢
酒くさるやとん剥りくおれの声

貞作新宅

け者と清原もきくつとて杖たお

去炭刻る火着ると斧の幽り
埋火やと蒸けけいりく 焼
火煙のくく麻夢子ま葉を枕に
岡右の糠をそ浮世子破る物葉
結つてしよこれ福もや納豆汁
立厩

多縁の豆下とどかりんありとせめ
岡守れ紙子もむ矢々きりり
朝嵐馬の目くり頭巾汁
かきこも道極の死れ七日市

宿僧房

わき色形一爾伽のおとよみお葉
お便へお教をさぐくも柄う那
氏着中や家上れ教のうけ不
張存屋の筆整るるく少お街
鳴子鳥来お明ふの夢をさぐ
村子鳥来お明ふの夢をさぐ

人の書む久しうり

お多譽れ意とらようすはる
片くくと盛れ危やお多譽れ

お多譽れ意とらようすはる

お真

夜真川 益人犬やきり山
犬引く三層持得りり里お真
菰一まきりあや乞合れあめ鳥
顔見世市川之絆を統す

夜学感

お多譽れ意とらようすはる
お多譽れ意とらようすはる

月小酒賣不許入内とてな
こわい〜

多家の隈にともてり水程
嘯むきやふもそんぐぬもかみ
町神一茶店ふのひんせうは

貞徳翁五十年忌元禄十五
年壬午震月十五日懐旧乃
くを述ゆ

節ととも花橋のむ〜ゆ
震月廿七馬候于黄門光国

卿之清茶亭題周山之佳景

一 かわも後の清茶屋むらまは
多喜ねをう〜しげふけまふ言
田の青山あ〜と〜と〜

ふれこみ破能清〜氷茶屋
二 清水寺喜ね

権精舎栢や千〜のま〜あ
六角堂孫子堂小町々石塔
あ〜と〜あ〜むお〜く〜り色ぬ

三 耕作の清茶屋

九分とらふ多分屋子苦さく入る處
はひりく大根苦味をたれと
引く根を梅子漬とくけり

根涼ひくまは子苗やあやめ州

四 黒木此中茶屋 けりすくす并

生後さくさく堂合樹林の
つよみん強しぬ茶屋の解を
少ける朝は内藤をくく新野
千一とまつとまら

我や旗牛子高候つと木茶屋

五 夏棚 あな棚さく夏茶平一子依
わり

夏草やあま道よやとる不破庇

六 西行堂 及ののほろ柳言

彼は所より此山は向くともく
とるる岩より乃若居水をわ
すはるもあま位はくあまを
さよせり

炭や岩間をかー此はあまとい

七 唐橋 庵門をんて去とと

海子海あつと考用しは干
とんせり

虫橋や舞田しとわひんかき松

八八の飛たるるを

坊多新月中も所よ流川あり

九河原書院とく先く水也

と評すの笑

八八代とそ河原水鏡此法子と

十西湖とく先いと流の中亭

よ今所村白を憐むてり

夏よ毎舟よ家一と西湖あり

とふと云く東飯くくを評す

詩とあき^漢新如む言此橋小船

右十妻

系此逃居炭の里人を宛名あり

松風や那よ家士をゆく西屋形

後よ終る一炉の教系系氣集

轍

事おらぬ飯りくみとお板衣

鉄炮のり流もくやあくとけ

とを切るいよくおく一飯の面

詩くゆを松に北河豚といふ

鯨とく寸轍中くうんまの轍

ちくちくふたは酒さきそを 霊全もききか
 をいさよはけし使を何奴つと
 扱出しくきくから拂入柄袋
 置たも一落新の掛菜よみかお
 秘房の鶴れ居るさどおめ
 家人と

冬深し清平や 置くゆい
 朝去るや月雪居るきぬの味
 雪か向たうもも蘇鉄の女を
 秋くあく昨乞の菊と麦畑

極寒

さくさくよの道積もほりし雪か
 伊勢宿と忘ぬそまこと此種扣

袴たき歌

御さきく 暖るの一言ふ
 御さきくさきく ともいふか
 花さきくさきく ともみられを
 さきくさきく 袴さきくさきく
 おしー袴さきく 袴さきくさきく
 袴さきくさきく 袴さきくさきく

世にたれをばけし 世一の道
 義にたれをばけし 義一の道
 七十古来 稀ありと
 やつこころ心 於るあり
 酒をかくらん 杯をくむ
 あらやうさの 杯をくむ
 凍死忽死の 境や杯をくむ

漫成五倫

君臣有義

家の子孫ありしを高くかき守る

父子有親

能くやけしを親とて敬ふ

夫婦有別

夫とて妻とて出ぬるを別

長幼有序

長とて幼とて敬ふ

朋友有信

君とて我とて信をくむ

大小の吟 元禄十丁巳年

大をばを志す 大をばを志す

あまづりれお坊さふと昨を死す

舟町海の画談

弟孝りや只とせむおとる海子
え日を起すやうなり良孝作
良孝は左の耳にありとく
居し物よりをす

輝拂や諸人々も極る陰成り
を若る明る餅はくをを唱り
いふ今し年のはる此よへき候り
酒債尋常往処者人生七十古来稀

詩わきんと年を貪り酒債カカテ外
候りや子年流産居れ年の流
年中の放下思ふらうと此書
豆とく川声此ら多き笑ひ那

乾元の名か

長ふ扱れきくく近し得方丸
三神不務種堀此自画談
今くふ周十帝や思ふ外
遠く年此あは世おつく
多し紙や只業の中此油ひす

くもは波流をそのいしし其の由乃
ゆりし伊賀此志のくをといのあし
りしぬるをいひてその山より
くくよやをよ

並に於よ及此小みや多事此等

何事んしお伊賀よハハハハハハ
をく我らとらんをととととととと
世の中とくけあらんや

妖ありし概實しき昨をうか

大晦日福のりしとらりし年とと

法玄園より破産をとうととと

誰よとあしお大敵とととと

りししも戸板めりたし一雉の跡

りし年尔唾吐しむかみとと

聖代

之病ありし日しとあふふ大晦日

雑之部

十及の圖画ハ略之

往昔異邦の佛澄淨昨十
半とあしし人向迷悟のりしを
志んししとととと其書を相伝は
るしとととととととととととと
とととととととととととととと

爰に十及の家と画漢に傳て
笑と万世に孫すよの晋其角

尋牛

やこれおのりしつ中目おん

呼牛

ふかきあは道閑てりさうなる

隠牛

爰に扱ハ孫ぬよ病氣の起り

貧牛

仁兼刺やと孫かうくも年男

廻牛

小使も貧ふあやうふ月日

番牛

かくさす曉年をかつせり

無牛

さうくす枕も床も物履小

半牛

何となくあそ夜と外とをや

送牛

さあよの牛も危きなわ

老牛

りふしきんうきんのかきつめふは
松冠里公右歌五之梅

三梅

三梅や真の洞へのりけいん

三梅のまき平ぬ草や梅のま

村ゆれとまきしつや芳根の松

九峰丸より官をたぐく聖路の

松といふあついなまき

三梅線よりに御り口の松れ

一丁のめくろの名ふりしよき

志うの城といふまきしつ

春よがしりわりしるまゆん

城といふ字のくまきまよ

梅子わらして一町世話をや

子を捨てしむあしつる親の松

まきといふはくまきしつ

盆會

ちき魂も二日しやらあつ

十日しやらあつあつ

ひさしをさへくしのと
とらふふくすふくす
まはすまはす

馬車紙よこし
あつたつた

我れは 柳梅柳
鳥のむくさ免か

追加

かみずさや
解所 困極く

天智天皇

おはさむ入席の首ふ
美お紙を
薄念

山嶽の顔の後れ

画漬

條分や葉の月おのり

妙法蓮華經

多しりや法の蓮花の華經

雪舟亭の花見ふりうそ

似をひゆる深あうりう系極

自画讃

掉席やとも紙子夏花体合

用より大工石りうむ路の梅

九條教浄下向

傳奏りりよの六見をやむ此門

法教場小馬休めりう大根川

法師及冬先の如くと大根川

後州久能の別南さんさあ

かして浄色こりわらを

ゆいさや浄年男の膳安

成 旨延享四丁卯年秋八月全編校合
百萬音原

續五元集 其角附合 全部三册 出来
玄峯集 嵐雪句選 全部二册 出来

江都書肆
日本橋通三丁目
竹川藤兵衛板

丁吉老
凡五
子



